



私たちには、過去世代の義務を受けて、権利を得て、自分の義務を果たし、未来世代に譲る役割があります。

私たちの生活が先人の道徳的な実践によって成り立ってきたと考えるとき、その恩恵は世代をわたって引き継がれ、引き受けられ、引き渡されてきたことに気づきます。こう考えると、今を生きている私たちには、これまでのどの世代もそうであつたように、この恩恵を未来につなぐ責務を担っており、その選択をする。権利を与えられていることがわかります。

私たちが生きがいのある豊かな人生を築くには、さまざまな恩恵に「支えられて生きていく」ことへの自覚が大切だといわれています。モラロジーでは、こうした自覚のもとに、社会的な義務や責任を積極的に果たそうとすることが、道徳の実行であり、品性の向上につながるとしています。

一般的に義務は「しなければならないもの」と捉えがちですが、多くの存在に支えられている社会の一員として、「喜んで奉仕させていただくもの」と受け止める方を変えると、見える風景が変わってきます。自分を支えるさまざまな恩に思いを馳せて、恩を知り、感じることで、初めの大切な一歩になるでしょう。

モラロジー研究所の概論講座で使用される改訂『テキスト モラロジー概論』について、今月は道徳的視点からみる義務と権利の関係性を図解します。



モラロジーを楽しく、平易に学びたい——。そんな要望にお応えして、この連載では改訂『テキスト モラロジー概論』の内容を図で解説します。ご自身の学習に、あるいは勉強会の資料としてご活用ください。

構成＝「れいろう」編集部

道徳から見た義務と権利

——未来世代に恩を贈る

きのにたじょうこう
道徳科学研究センター教育研究室 木下城康

「義務」と「権利」と聞いて、あまりいいイメージを抱けないのは、私だけではないはず。

このように感じるのには、義務には「やらなければならないもの」、やらされるもの。権利には「声高に主張するもの」という印象があつて目ごろの生活に馴染みがないと感じているからかもしれません。

ところが、モラロジーの視点からは別の風景が見えます。私たちの日常生活の視野よりも広く、奥行きがあるのです。そこでは、今を生きている個人に止まらず、世代を超えた見方をします。まるで「恩」というバトンを引き受け、次に引き渡すリレーランナーのように考えることができるのです。

図をご覧ください。右側にいる過去の世代は、自分たちが行ってきた道徳的な苦勞（義務）を現在の世代に権利として渡そうとしています。現代の世代は、そのバトンを受け取り、いざ走り始めようとするときになって、その重みに気づき、何かを感じ取ったようです。そして、次の世代につなぐために懸命に自分の役割を果たそうとしています。